

SONRISA

そんりさ

Vol.125



気候変動巡るボリビア会議

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- | | | |
|----|----------------------|------------|
| 2 | ボリビア気候変動世界会議 | ：松枝愛 |
| 5 | ボリビアだより その5 | ：藤田護 |
| 8 | エクアドル債務問題講演記録 | ：青西靖夫 |
| 10 | グアテマラ「民衆法廷」その後 | ：新川志保子 |
| 18 | グアテマラ支援の検討報告についての見解 | |
| 19 | コロンビア 自由貿易協定の酪農家への影響 | ：翻訳ワークショップ |
| 20 | コロンビアの米国にとっての軍事的重要性 | ：翻訳ワークショップ |
| 22 | ラ米百景『ディアスポラ文化論』 書評 | ：伊高浩昭ほか |
| 25 | フォトコンテスト「ラファミリア」 | ：柴田大輔 |
| 27 | 音楽三味♪ペルーな日々 | ：水口良樹 |
| 29 | メキシコ食巡り | ：ミゲル・アクーニャ |
| 30 | ニュースクリップ | |

エボ・モラレス提唱「気候変動および母なる大地の権利に関する世界民衆会議」はCOP16と国連を動かすか

松枝 愛（まつえだ・めぐみ）

米国の京都議定書への参加が再度促された。

民衆の声を拾い上げる会議

会議を提唱したボリビア大統領エボ・モラレスは二〇日の開会式において、コペンハーゲン合意の失敗は、京都議定書で同意したはずの義務を履行していない先進国が利益を優先し、非民主的な方法が取られたため、真に民主的な話し合いの場が必要であることが当会議開催の経緯であるとした。また、自然と調和して暮らす先住民族の「善く生きる（ビビル・ビエン）」概念を挙げ、我々人類は、資本主義と母なる大地のどちらを取るか選択を迫られていると指摘した。

会議は一七の作業部会に加え、非公式の一八番目の「円卓会議18」が市民の手によって設けられた。以下の公式一七部会はそれぞれ今会議の議題である。

1. 構造的欠陥
2. 自然との調和
3. 母なる大地の権利
4. 住民投票
5. 気候変動国際法廷
6. 気候移民
7. 先住民族
8. 気候債務
9. 共通目標
10. 京都議定書
11. 適応化
12. 資金調達
13. 技術開発および移転
14. 森林
15. 排出権取引の危険性
16. 行動戦略
17. 農業および食料主権

上記の中で特に「母なる大地の権利」採択および「気候変動国際法廷」の設置は、世界の社会運動ネットワークの支援を得る形でボリビアが国を挙げて国連に訴える姿勢を示しており、会議の目玉であった。また、非公式の「円卓会議18」は会場外の小さなホールで行われたのだが、主に先住民の諸組織が集まり、ボリビア政府が推進する資源開発を抗議する内容となった。「真に母なる大地を想うならば、政府にとって都合の悪いことも良いことも、同じ土俵で話し合われるべきだ」というのが参加者たちの意

近年世界各地で開かれるようになったアースデイのイベントの中でも、今年は特にボリビアでの国際会議に注目が集まった。一四〇カ国から社会活動家やNGO関係者ら約三万五〇〇〇人が集結したこの会議名は、「気候変動および母なる大地の権利に関する世界民衆会議（Conferencia Mundial de los Pueblos sobre Cambio Climático y los Derechos de la Madre Tierra、略称CMPCC）」。二〇一〇年四月一日から二二日までの四日間（公式発表では二〇日から三日間）、ボリビア中部コチャバンバ郊外のティキパヤにおいて開かれた同会議は、前年一二月に成果を出せずに終わったコペンハーゲンでの国連気候変動枠組み条約第一五回締約国会議（COP15）に異を唱え、民衆の声を気候変動問題の取り組みに反映させるために開かれた。その成果は五月七日、NYの国連代表部において、「G77+中国」（アジア、アフリカ、ラテンアメリカの開発途上国七十七カ国+中国）の代表を前にエボ・モラレスによって報告され、

見だ。議題が上がった開発プロジェクトの中には、住友商事が出資するポトシ州サンクリストバル鉱山開発への先住民反対運動もあり、先住民らは会議開催期間中八〇〇人余りを動員して道路を封鎖し、同社と住民間の同意事項の履行や、鉱山廃棄物による水質・土壌汚染を訴え国際ニュースになった。

会議は大きな混乱もなく、コペンハーゲン会議にも参加した活動家たちは、COP15において閉め出されたが、今回は誰もが話し合いに参加できることを喜び、世界の民衆が話し合うことでこの問題を解決することができるのだと主張した。また気候変動交渉のボリビア代表アンヘリカ・ナバロは、米国で同時期に開催された一六カ国のみでのCOP16準備合会に関し、先進国がコペンハーゲンの失敗を繰り返そうとしていると指摘し、当会議は誰もが参加でき、国連の気候変動枠組条約会議も本来このような形であるべきだと述べた。

会議合意文書

二〇日の開会式に一万五〇〇〇人だった参加者は、最終日の二二日には三万五〇〇〇人余に達し、モラレス大統領のほかベネズエラのチャベス大統領も会場に駆けつけた。ニカラグア、エクアドル、パラグアイの各大統領は参加を取りやめた。その理由は明らかにしていない。同日、当会議における合意文書が発表された。

それによると、気候変動の先進国による対応はその原因である資本主義システムを疑問視することなく、単なる気温上昇の問題と捉えていると非難し、飢餓、食料問題、気候難民といった現在起こっている、また今後起こりうる大問題に触れ、搾取と貧困を生む資本主義に代わる新しいシステムの構築において考慮すべき点として以下を挙げた。

- ・すべての人々と、あらゆるものの中で調和と均衡がはかられること
- ・助け合い、連帯、公正
- ・母なる大地との調和の上での集団の幸福と必要最低限の充足
- ・母なる大地の権利と人権の尊重
- ・人間を認める上で、何を所有しているかではなく、ありのままを受け入れる
- ・あらゆる植民地主義、帝国主義、介入主義の排除
- ・人間と母なる大地の間の平和

この実現に向け、同会議は「母なる大地の権利のための世界宣言」の採択を呼びかける。また先進国は、二〇一三―一七年の国内二酸化炭素排出削減目標を一九九〇年比で少なくとも五〇%以上にし、GDPの六%以上を途上国の気候変動支援に充てる。気候変動に関する紛争解決機関「気候変動と環境に関する国際法廷」を設け、その決定を遵守する。国連の抜本的改

革を提案し、促進することなど、会議で話し合われた内容が網羅的に折り込まれた。

国連代表部での報告

合意文書の内容は、民衆会議から約二週間後の五月七日、エボ・モラレス自身によってNYの国連代表部で報告された。気候変動交渉の場で存在感を増しつつあるG77+中国の代表団の前に、モラレス大統領は、今回の民衆会議には計三万五三二二人が参加し、うち九二五四人は五大陸世界各地から集まった外国からの代表団であったこと、また、政府代表の出席は五六カ国に上ったと述べた上で、「ボリビア政府がこの会議を提唱した背景には、昨年のコペンハーゲンでの会議において先進国が温室効果ガスの持続的削減目標を設定する義務を怠ったことがある。もし先進国が京都議定書を尊重し、国内での持続的削減に合意していたならば、この会議は必要なかった」とし、今年一月にメキシコ・カンクンで開催予定のCOP16が成功するには、世界民衆の幅広い参加とG77+中国の確固たる団結が唯一の鍵になると述べた。

G77+中国の団結を求めるにあたってモラレス大統領は、民衆会議とG77+中国に共通する見解を三つ挙げた。

一つは、G77+中国国連加盟国の三分の二、つまり世界人口の八〇%を代表しており、全参加国は、京都議定書を尊重している。民衆会議

でも、京都議定書の存続と遂行の必要性が唱われた。つまり、先進国が途上国の被害の責任を取るべきだとする姿勢である。

次に、気温上昇を一一・五度の範囲に止めるためには、先進国の排出目標を上げるべきだとする共通認識があった。

三つ目の共通点には、先進国の「気候負債」の問題が挙げられた。先進国が排出する温室効果ガスが占める大気の「植民地化」を脱し、全ての国がそれぞれの人口によって平等に大気配分されるべきだとした。同時に「気候移民」の問題では、現在気候変動によって五千万人が移住を余儀なくされ、その数は二〇五〇年までに二億〜一〇億人に達するとした。物議を醸している米国アリゾナ州の移民法とEU上層部の姿勢を拒絶しつつ、気候変動の影響で移住を余儀なくされた人々のためには、どの国境も開かれるべきであると述べた。

気候負債に関しては、被害を受けている人類のみならず、自然にも平等に対価が支払われるべきであり、母なる大地の権利のための世界宣言の可能性を国連総会の場で話し合う必要が民衆会議で確認されたことを報告した。世界宣言は民衆会議で一七の作業部会が採択した「民衆合意」に盛り込まれており、特にモラレス大統領が強調する項目である。

民衆会議の成果は国連を経て、COP16に反映されることが望まれている。またカンクン会

議に反応する形で、二〇一一年に第二回「気候変動および母なる大地の権利に関する世界民衆会議」を開催することが約束された。

◇台意文書全訳は、開発と権利のための行動センター (<http://cade.cocolog-nifty.com/ao/2010/04/post-c4fb.html>) サイト。原文は、民衆会議公式サイト (<http://cmpcc.org/category/acuerdo-de-los-pueblos/>) 参照。
五月七日の国連での演説文（スペイン語）は、<http://cmpcc.org/2010/05/07/discurso-de-evo-al-g77-en-la-onu/#more-1970> に掲載。

ポリビア使り (その5)

藤田護 (ポリビア外務省外交アカデミー客員研究員)

(6) 言葉について、いろいろ

栗原 そういふ感じでアイマラ語は始めたんですけども、どうか、ただ、アイマラ語とねケチュア語を比べるとね、どうか、それぞれ一長一短があるんかもしれない。(笑)。どういふかな、会話するのはケチュア語のほうが易しいかなとは思いますが、私にとっては。文法書が整備されているからじゃないでしょうか、そのせいですかね。あとアイマラ語は発音がちょっと難しい。でも最初はね、とっつきはアイマラ語は難しかったけど、まあ二、三年しゃべっているうちにだいたい慣れてきましたけれどね、今はそんなに不自由はしなくてすけどね。

ただ私は、よく学校の先生とかね、概して先生はあまりにも厳しすぎるのかな、言葉に対して、細かいところに。でそれは私はどうも勉強するのは、良くないと思うんですよ。もつと、原則として私は言葉は社会でしゃべっているのが言葉だと思ふし、学者とかはアイマラ語は純粹でないといけないとかね、そう言いますが、私はもう町でしゃべっているアイマラ語が純粹なアイマラ語だと、アイマラ語に良いアイマラ語も悪いアイマラ語もないと思つてたんで。日本語も同じで、方言あるでしょ、あと外来語もたくさん混ぜてね、みんなしゃべってますよね。だからそういう意味でアイマラ語だって、

スペイン語と一緒になつてね、混ぜつてしゃべつて全然差し支えはないと。だからそういう意味でね、学校の先生はあんまり好きじゃないです。まあ先生にもよりますけどね。だから概して学校の先生はアイマラ語をしゃべるところをね、力づけるよりも興味を削ぐような感じで「これはアイマラ語じゃない」「こう言つてはいけない」とつていう風にね。そういう意味で、ラジオの先生はまあ先生によると思ひますけれども、原則として町で習うのがアイマラ語だと思つています。町で習うなり村で習うなりね。まあだから言語学者はこう言うし、しゃべるコミュニティはまた別のアイマラ語で、それでいいと思つています。まあ外人だから発音とかね、絶対に現地人の人とは同じようにはしゃべれませんよ。スペイン語だって外人は同じようにはしゃべれないでしょう。それと同じで、ただ意味が通じれば、コミュニティができれば、それが一番の目的だと私は思ひます。

藤田 ラパスでもコチャバンバでもこういう風に市場に來たりして、アイマラ語とケチュア語を練習されているんですか。

栗原 そうですね。市場に來たら大体アイマラ語でしゃべりますね。コチャバンバに行けばケチュアでしゃべつて。まあちょっとした文法的な疑問とかは先生に見せる、それだけです。

生の笑。

藤田 市場以外だと他にどういふ所で、

栗原 サンタクルスだとね、大家さんもケチュア語をしゃべるし、お手伝いさんも、大家さんの使用人もケチュア語をしゃべるし、まあどこに行つてもアイマラ語をしゃべる人はいるから、友達になつてもらつたり。こつちだともう、ラパスだとアイマラ語はどこに行つてもしゃべりますからね、ただサンフランシスコ「広場」よりも南の方はダメですね、ここ「サンフランシスコ広場のこと」までですね、これが限界で。サンフランシスコ「ロドリゲスを結ぶ線より上」の方かな。ソポカチに行くともう何か英語の世界ですよ。(笑)。

いつも思うんですけどね、言葉をしゃべると性格が変わると思ふんです。だから私が日本語でしゃべるとケチュア語でしゃべるとね、性格が変わると思ひますよ。アイマラ語しゃべるとスペイン語しゃべると、性格が。だからね、ケチュア語とアイマラ語をしゃべると楽しそう、楽しくなる。でもスペイン語しゃべるとちょっと、笑、あんまり楽しくないのかな。だから、やっぱり波長に合ふんですかね、私の波長に。だからケチュア語が一番楽しいかな。Bogotá (アレグレ) かな。その次が、ちよつとアイマラ語はね、あんまり楽しい言ふ感じがないけど、笑、ケチュア語は楽しいですね。だから政治家でもね、こんなことを言つちや悪いけど、副大統領 (Alvaro García Linera のこと) ものすごく冷たそうでしょう。で彼がケチュア語をしゃべれば性格が変わつちやう、もつと楽

しそうになると思うんだけどね。言葉によって性格変わると思う。スペイン語だど…どうか、基本的にはアイマラとケチュアは日本語と遠い親類には当たりますよね。スペイン語はもう全然赤の他人。だからそういうところがあるんじゃないですか。だからアイマラ、ケチュア、日本語は同じ頭でしゃべれるけども、スペイン語をやるときはゴロツと頭を変換して考えないといけないからね。その辺が波長が違うんじゃないかなと思う。日本人にとってはね。

いずれにしても、あまり焦らないで、始めたとき、真剣にこれやりたいなと思ったときに、まあ十年くらいかけてしゃべれるようになればいいかなどね、思ったから。時間だけはたくさんあったから。お金もないし何も無いけど、時間だけはね。何かやっぱり投資しないと。時間か、お金か、まあ何かね。何も投資しないんじゃないんだから、まあ時間だけはもう投資しようよね、思って。だから二〇〇四年ぐらいから半分サンタクルスで働いて、半分ラパスに、そういう感じの生活で。去年からもうそろそろいいんじゃないかと、だいぶ自信も付いたんでね、もうそろそろこれで仕事ないかなと思って、まあこんなの誰もやったことないから二、三年は遊ぶつもりで始めたんですけどね、アイマラとケチュアの通訳を。

もし勉強したいという人がいたら、どんなやり方でも、やり方に関係なく、能力とかにも関係なく、十年なりね、長い間続けていけば、それなりの結果が出るんじゃないかなと思います。

藤田 どうですか、仕事って来ますか？

栗原 アイマラ、ケチュアはありません（笑い）。ボランティアです。だけどボランティアでも、自分で今時間があるうちに翻訳をしてね、お話とかね。だから日本語からアイマラ、ケチュアね、ケチュア、アイマラから日本語。それにまあ、仕事の時々ある時はスペイン語でしょ、だからまあスペイン語も、ねえ。長い間もうスペイン語もほとんど関心持ってなかったけどね、だからしゃべるだけはまあ不自由じゃなかったけれど、正確にね、できるようになれば、それもやっぱりアイマラ、ケチュアに役立ちますからね。アイマラ、ケチュアは今のところボランティアです笑。まあでもね、エーボさんも今回は「アイマラ語とケチュア語で」演説してくれたし…、まあそのうち、まあ二、三年は遊ぶつもりで始めてます。

(7) 南米ボリビアに住むということ

藤田 そもそもラテンアメリカに来ようと思ったり、ボリビアに来ようと思った理由は何でしょうか？

栗原 一回アルゼンチンで仕事の話があったんで、それで…

藤田 「チリよりも」もつと前に？

栗原 もつと前にね、それで、そう言えば、南米って面白そうかなと思って、それで興味をもつてチリに来たんです。それで来てみると、予想通り、よそ者に対して、とても開けている感じだね。来た人は誰でも受け入れる、と。

でその後サンタクルスの噂を聞いて、いい所だつていう噂を聞いて、サンタクルスに来てみたんですけども、そのボリビアに来てみると、何て言うかな、他の国とはですね、生活のリズムとか、生活の感覚がね、ずいぶん違うなと思たんですよ。何かあの…正直言つてこう…、例えばチリにしてもブラジルにしてもアルゼンチンにしても、生活の感じとか仕事のスタイルとかね、まあ日本とそんなに大きな違いはね…、私にとってはそんなにないような気がするんですよ。約束すればちゃんと守るし、約束すればまあそんなに遅れないで来るしね、約束は大事だしね、仕事上で。でもボリビアの場合は、それがちよつと違うんですよ。だから最初はちよつと戸惑いますけどね、その代わり…まあビジネスという面ではね、約束は守らないしお金は払わないし、ちよつと大変だとは思いますが、でも、その代わり皆さんね、生活を楽しんでるということか。よくボリビアの人は言うんですけどね、…ラパスの人はあんまり言わないか、でも特にサンタクルスの人はね、ボリビアには生活があつて、ここにはお金はないけども生活がある。他の国の人はもう仕事に追いまくられて、お金に追いまくられて、生活を忘れてる。そういう部分があるんじゃないかなと思いますよ。私にとつてみれば、ボリビア全体に、どこに行つてもね、生活を自分たちのペースでね、生活していい。ビジネスとかね、お金に追いまくられていない。ですからそこが、それなりに慣れてしまつとね、私にとつては気に入つてい

るわけです。

仕事をするには大変ですよ(笑)。会社をやろうとしたら、これほど大変な所はないですよ(笑)。お金は払ってくれないし、約束は守らない。そりゃあもう大変な所です、ビジネスをするには。契約書だってあつてないようなのですからね。でも、それを離れてね、あるお金で欲を出さずに生活する分には、また別の世界でね、ゆったりと生活できるんではないかと思ひます。

藤田 元々チリにいらつしやつたときに、日本に戻るんじやなくてこつちに住もうと思われたんですよね?それはどんな経緯で?

栗原 私はね...まあ...あんまり...どうだろうな、チリに行く時点でもう日本に戻つて生活する気はなかつたのかな。だからチリに行く時は単身で来たんですよ、私独身ですんで。一九九一年の三月まで日本にいて仕事して、でチリに行つて、それでスペイン語を勉強して、それから測量の仕事があつたんで、それで仕事させてもらつて。で一九九三年にボリビアのサンタクルスに行きました。いい所だという噂を聞いて。だからその頃は別にアイマラ語とかケチュア語とかね、そんなのは全く...。まあ測量でもやりながらいれればいいんかなと思つてね、来たんですけども。

それに南米って意外と日本とは環境が違つて、外から来る人を受け入れるとこでしよう。日本はどつちかと言うと外から来た人に対して閉鎖的だけでも、こつちはそれこそ「仕事したいよ」と言つたらそれこそ、「ああ、ある」そ

ういう感じですぐ紹介してくれたりするから、「ああここはいいとこだな」と思つたんかな。だからずつといふよかなと思つた。あと土地も広いし、環境全く違ふし。チリでもかなり違ふかなと思つたけど、ボリビアに来てみると全く日本とは一八〇度別世界で。で、お金はないにしても、他の国に比べてもね、お金はないにしても欲を出さずに生活する分には不足はないし、なんだかんだ仕事はある、なんかの仕事には突き当たるしね。まあ幸い測量をずつとやつてたからね、それがずいぶん生活するにはね、役に立つて。欲を出さない内には不自由しなかつたです。

だからね、私はね、ボリビアはこうやつて生活させて、いさせてもらうんだから、基本的にボリビア人は尊敬しないとイケないなどは、決してボリビア人に足を向けて眠つてはいけなと思つていゝんです。だからボリビア人よりも偉くなつてもいけないしね、まあボリビア人が残したものを食べればいいかなつて。私にとつてここ宝の山なんです。ボリビアは。まあ資源とかも多いでしょう。リチウム、石油。日本にないもの、土地もあるしね。だからね、貧しい貧しいと言つていゝけども宝の山じやないかなと思ひますね。私例えば、アイマラ、ケチュアだつて宝の山ですよ。文化だつて歴史だつて言語だつて全てが。だけどみんなあまり大して注目してないで、蔑ろにしているでしょう。ボリビア人もあまり大して関心持つてないでしょう。だからボリビア人が関心持つてないものを、関心もつてね、やつたら面白いかなつて。

だから探せばここはなんぼでも宝物がね、出てくるんじやないかと、そんな気がいたします。もう五六歳ですから、私。だから年齢的なものがあるんじやないかな。若い頃はやつぱり仕事やつてお金を儲けてね、ああいうことに興味を持つていたけども、段々わりと、それこそ仏教の話じやないけども、まあ後は墓場まで平和に何かゴソゴソしてね、生活できればいいかなと思つて、それにはアイマラ語ケチュア語とかね、そういう文化に関わつて生きていければ、もし日本人が興味を持つ人がいれば、役にも立つだろうし、いいかなと思つて。

藤田 ありがとうございます。(おわり)

。サンフランシスコ広場はラバス市内の結節点のようなところにあつて、エルアルトから高速で降りて来るとここに到着し、そこから下に向かつてPaseoという大通りが始まり、政府の建物のある中心部からも近く、またそこから少し上がったところにロドリゲス市場があります。ソポカチ地区はもう少し下つたところにある。かつての高級住宅街で、日本大使館も「NY」の事務所もそこにあります。現在の富裕層は、もつともつと下に行つたところに住んでいます。

。といながらも、このインタビュの一部はテレビ局の取材スタッフへの「アイマラ語」の通訳の仕事の合間に行われています。

。2010年1月25日のティワナク遺跡でのエボ・モラレス大統領の就任演説を指します。私もRadio San Gabrielのチームの中で取材をしていたのですが、エボ・モラレス大統領は演説冒頭しばらく、まずアイマラ語で、次にケチュア語で演説を行い、周りの参列者たちが「ああ、やつと学ぶ氣になつたか」という趣旨のことを次々に言い交わし、満足そうな顔をしていたことが印象に残っています。2006年の演説にこれはありませんでした。

栗原重太さん連絡先「アイマラ語・ケチュア語をしゃべると新しい世界が見えてきます」

通訳(アイマラ語、ケチュア語、日本語)

住所 ラバス市ラレカッパ通り 287番地

電話 71207731(携帯用)+591-2-2287388

Email kuriharashiget@hotmail.com

エクアドル

債務返済の鎖を裁ち切り

新しい持続的な社会へ向けて

青西 靖夫

二〇一〇年三月、おおさか社会フォーラムに参加するため、エクアドルで債務問題などに取り組むジュビリー・エクアドルからデルファ・マンティージャさんが来日されました。ここではデルファさんの報告から抜粋してお伝えします。

開発のための融資は本当に役立つたか

長年、開発のために先進諸国から借金をする



という戦略が使われてきました。市民社会としては融資を利用するというものを一概に悪いと言うつもりはありません。しかし私たちの資源は債務の支払いのために奪われ続けてきました。そうした中で、エクアドルだけではなく、南米各国の市民社会は、先進国からこうした融資が本当に私たちの開発に役立つてきたのか、あるいは私たちの希望を埋葬してきたのかを明らかにするための監査を要求してきました。こうした市民社会からの声に呼応して、エクアドルのコレア大統領は二〇〇七年に「公的債務監査委員会」を設置しました。

そこで明らかになったことは債務は貧困の原因であり、私たちの資源は、債務の支払いのために奪われてきたということです。ワシントン・コンセンサスやIMFによる構造調整政策に基づき、国家予算の多くが債務の返済に振り向けられ、保健や教育、住宅など基本サービスへの予算は削られてきました。国家予算（一九九六―二〇〇六年）のうち、六五%が債務支払いに向けられ、教育に一二%、保健には四%しか使われませんでした。

またここ三〇年間にエクアドルが受け取ってきた債務は債務の返済を維持するために使われてきたのです。海外からの融資の四%のみが国内投資に使われ、三〇年間にわたって受け取ってきた融資の九六%は債務の支払いを維持するために使われてきたのです。

こうして私たちは借りたお金以上の金額を返済することを強いられてきました。これは資金が私たちから先進国に流出していることを意味しています。こうしたことを監査を通じて明らかにすることができたのです。エクアドルだけではなく、ラテンアメリカ諸国はこうした対外債務を既に支払っているということです。

債務支払いのための石油開発から持続的開発のためのヤスニ提案へ

石油はエクアドルの国家収入の重要な部分を占めています。この石油からの収入は対外債務を返済するために使われてきました。しかし石油開発は、私たちの国民の生活を脅かし、自然を破壊してきました。石油開発によってアマゾン地域の熱帯雨林も破壊されてきました。川や土壌を汚染し、生物多様性を損ない、先住民族の文化も失われてきました。

アマゾン地域で石油開発を行うことは、地球を殺すようなものなのです。そこで人口たった一二〇〇万人の小国であるエクアドルは、世界にむけて新しい提案をしています。アマゾン地

域にあるヤスニ保護区における石油開発を放棄することを提案しているのです。生物多様性の宝庫であるヤスニ保護区はユネスコの生物圏保存地域としても登録されていますし、タガエリ、タロメナニ、ニャノメナニという三つの非接触先住民族も居住しています。

エクアドル政府は、先進国が支援してくれれば、このヤスニ保護区における八億五千万バレル

の石油採掘を放棄しようとして提案しています。これは四億トンの二酸化炭素の放出を放棄することになり、気候変動の緩和にも貢献することができますのです。しかしこれは様々な国々の連帯があつてはじめて実現できるものです。そこでこれまで大気を汚染してきた先進諸国に共同責任をお願いしたいのです。八五%の温室効果ガスは豊かな国から生み出され、ラテン

アメリカ諸国は三%を排出したに過ぎません。しかし気候変動はより貧しい人に被害をもたらしています。干魘や洪水の被害も出ています。そこでともに地球を守るために、人類を守り、未来の世代を守るために協力していくことをお願いしたいのです。

南の銀行―競争から補充へ

九十年代中頃からラテンアメリカ各国で進歩的な政権が、人々の必要性に目を向けている大統領が、生まれ始めました。ラテンアメリカの人々は、長年にわたって自然資源を奪われてきましたが、今、新自由主義に対抗する新しいモデルに取り組んでいるのです。競争ではなく、補完性に基づく関係を築こうとしているのです。

南米諸国連合では、IMFや世界銀行の処方箋が私たちの国々の開発に寄与で

きなかつたことから、新しい「南の銀行」の設立を進めています。北の国々による経済的・金融的・政治的支配から脱却し、南米諸国の主権に基づいた統合を実現し、より人間的で、自分たちが開発の主体である社会を築いていくことを目指しているのです。これは域内のオータナティブな開発を実現するためのものなのです。その資金で食料主権の確立や、技術開発、伝統的知識の再興、地域の大学の設立などを行っていくとしています。

「公的債務監査委員会」の報告書要約

債務問題や国際金融取引の問題に取り組んできたATTAC-JAPANが翻訳版を作成して販売しています。詳細は、翻訳・編集した「エクアドルの公的債務監査報告書刊行委員会」担当 wen_zhao1917@yahoo.co.jp (稲垣) まで

ヤスニでの石油開発をやめようという取り組み

組み ニューインターナショナルリストが取り上げています。2008年7月号、N1 No.413 & ニジャパン No.101 「石油依存社会への提言―エクアドルの新たな試み」<http://www.ni-japan.com/>

グアテマラ

「戦時下性暴力についての民衆法廷」その後 アルタベラパス・イサバルの女性を訪ねて

新川志保子

前号では、三月四、五日にグアテマラで開催された「戦時下性暴力についての民衆法廷」のレポートがありました。今回は、その後この性暴力プロジェクトに参加している女性たちを訪問した報告です。

このプロジェクトには現在一〇〇人の女性が参加していますが、このうち六〇人ほどがアルタベラパス県とイサバル県（マヤ・ケクチ語地域）に住んでいます。二〇一〇年三月一五日から二〇日まで、法廷後のフォローアップで、ECAP（社会心理行動と共同体研究グループ、このプロジェクトでメンタルヘルスを担当）による視察があり、それに同行したものです。レコムからは新川志保子と上智大学院生の中川幸さんが行きました。このフォローアップの目的は法廷後女性たちがどうしているか、また法廷をどう評価しているかなどを知ることでした。

三月一五日（月） 首都のECAPオフィスに集合。ケクチ語地域を担当する心理学者のアイデー・ロペスさん、プロジェクト・プロモーターのアナ・アリシア・ラミレスさんと一緒に

昼前に出発する。グアテマラシティを東へ一時間ほど走るとサカパ県に入りテクルタンという町に到着した。ここで昼食を取り、またここには大きなスーパーマーケットがあるので、私たちが滞在する五日間分の飲み水と、訪問する女性たちとの会合のために、ビスケットやジュ



アフリカヤシのプランテーション

スなどを買い込んだ。

さらに進み、マリスコスという町を通過したところで北西に折れ、大きなプランテーション（フィンカ）に入る。この一帯は大土地所有が多い。現在は「バイオ燃料」のための油ヤシ（アフリカ椰子）のプランテーションとなっている。グアテマラでも近年油ヤシの栽培が増えていて、環境破壊が問題になっている。今日の目的地はイサバル県のセプルサルコというコミュニティだが、国道を通って行くとかかなりの遠回りになるそうで、いつもこのルートを使うということだった。私有地を通り抜けることになるので、入口でガードマンのチェックを受けてから通してもらおう。時には通行料を五〇ケツアル徴収されることもあるようだ。三〇分走っても、まだプランテーションだ。このあたりまでくると、グアテマラシティの乾燥した気候とは打って変わって蒸し暑くなる。

午後四時頃セプルサルコに到着。ここにはプロモーターのもう一人アマリア・スプさんの家がある。彼女の家に二泊する。セプルサルコはイサバル県だが、アルタベラパス県との県境が近い。この二県は同じ言語地域で、プロジェクトに参加する女性たちは両県にまたがって住んでいる。セプルサルコは一帯で比較的大きなコミュニティで、小学校と中学校があり、電気も通っている。集住化が進んでおり、隣の家との距離はわずかだ。たいていの家は敷地に低い板塀や杭などを巡らせてある。このあたりのコミュニティはほとんどがフィンカの中にある

が、セプルサルコも例外ではない。この村は三つのフィンカにまたがっており、住民は三〇年前から土地獲得を求めてきたが、今に至るまで解決していないようだ。

内戦中、この一帯にもいくつもの軍の駐屯地が作られ、その多くがフィンカの中にあつた。地主は軍を歓迎し喜んで場所を提供した。また、地主自身やカパタス（農園の人夫頭、監督）が軍コミッシヨナーとなつていたケースも多い。軍コミッシヨナーは武器を持ち、軍の手先となつてコミユニティの中で強大な権力を持ち、自警団を指揮してゲリラの摘発などを行つていた。軍コミッシヨナーによる人権侵害も非常に多かつた。セプルサルコなどのコミユニティでは、夫を殺された女性や独身の女性・少女が選ばれて、数人ずつ交代で駐屯地に行くことを強制された。日中は炊事や洗濯などの仕事をして、夜は兵士の相手をさせられたのだという。この

性奴隷状態が長い人では一二年に及んだ人もいるという。これから逃れるために望まぬ結婚（再婚）をした女性たちもいたようだ。

アマリアの家は彼女の母親と現在の夫、父違いのきょうだい数人とその家族らで、総勢一〇人が敷地内四軒の家で生活している。それぞれの家は一間だけの小さなものだ。そのうちの軒は台所兼食堂として使われている。通りに面した側の建物は雑貨を売る店になつている。洗い物や水浴びをする水場（ピラ）と少し離れたところにある便所は家族が共同で使っている。

この村には水道も通つているのだが、私たちが着いた日は水が出ていなかった。そのため、翌朝は近くの川に水浴びに行った。今は乾季なので、比較的乾燥していて蚊も少なくてのぎやすい。雨季になるとずっと蒸し暑く、蚊もすごく大変だという。



アイデーさんとアマリアさん

三月一六日（火）川で水浴びをし

てから朝食をとり、車で出発する。最初に行つたのはエスペランサというコミユニティ。ここはアルタベラパス県になる。デメシアさんの家に八人の女性が集まつた。まず、アイデーが訪問の目的を説明し、それに応えてそれぞれの参加者が話した。どの集まりでも皆が共通して言つたことは、法廷後は何の問題もなく落ち着いているということ、自分たちに起こつたことを告発する法廷を開催したことを評価し、国

際社会からの傍聴や、政府の役人が来ていたことは彼女たちにとつてとても重要なことだった。宿泊や食事の手配などのオーガナイズ、E CAPとアイデー、アマリア、アナ・アリシアのアテンドにも感謝。私たち二人の訪問も喜ばれた。以下にその他の発言を抜粋する。

マリアさんは、「法廷にとつても満足している。内戦中夫は軍に連れ去られ、二人の子どもも残された。補償は何もない。その苦しみを告発できたことはとてもよかった。プロジェクトの成功を祈つて毎年儀式をしているが、それがとても精神的な支えになつている」ことだった。セシリアさんは五年前から参加している。二年前に夫が殺され、コナビグアに迷わず参加した。

デメシアさんは私たちの訪問に感謝してくれ、「法廷では、宿や食事の手配などお金がかつたことと思うが、自分たちのために資金を調達してくれて感謝している」と語ってくれた。カンデラリアさんもコナビグアに参加していた。「法廷に満足している。証言を聞いたときはつらくて泣いたが、大きな成果だった。これまでは、自分の心だけにしまつていたが、それをプロジェクトの中で話し合うようになり、そして法廷で告発した。ニュースやテレビにも取り上げられて、内戦の暴力と自分たちの受けた苦しみが本当に起こつたのだということをお訴えられた」

「証言を聞いて、思い出して泣いてしまった

が、自分たちの苦しみを告発できたことはよかったです。帰りのバスの中、ラジオで法廷のニュースが流れ、感慨を覚えた」(カルメンさん)

「証言を聞いてつらかったが、告発することに意味があった。補償は受け取っていない。法廷のような大きな催しをオーガナイズしてくれた人たちに感謝する」(フェリサさん)

「貧困家庭を援助する政府の補助金(MIAPRO)を受け取りに行かなければならなかったので参加できなかった。が、法廷が成功してとてもよかったと思う」(アントニアさんとマヌエラさん)

集まりの最後に、アイデーが今後の活動をどのように続けるかについて考えておいてほしいと話した。法廷開催で一つの区切りがついたわけだが、今後どのように活動を進めていくかをこれから考えていこうという趣旨だった。

次に離れた場所に住むサントスさんを訪問。サントスさんも夫を軍に殺されている。息子が二人いる。下の息子は法廷に同行した男性グループ(注1)の一人だった。証言を聞いた時はつらかったが、帰ってきて決心して上の息子に自分が体験したことを話した。当時小さかった息子は彼女が被害にあった時その場にいたのだという。サントスさんは「話してホッとした」と語った。アイデーが「支えたいと思っただけでも状況が分からないためにどう支えてよいかわからなかったのでは? 何が起こったのかを知ること、今後はもっと母親を支えることができるのではないか」と励ます。

午後はパンス郡サン・マルコスというコミュニティに向かった。ここでは四人集まった。そのうちの一人、マルガリータさんは体調が悪いため、アイデーとアマリアが彼女と個別に話し合った。最近流産し、その後出血が止まらないのだという。次の日エルエストルの病院に連れていくことにする。まだ若そうだったが、マルガリータは被害にあった時まだ八歳だったという。

ロサリオさん「法廷の後、政府がどう対応するのか知りたい」

クリステイナさん「被害を受けたことは自分の人生に決定的なできごとだった。マヤの文化では、他の男のものになった女性は価値がない。再婚しようとしたが、相手から暴力を受けた。法廷は大きな成果、大きな一歩だった。今は(起こったことを)話することができる。グアテマラにはまだ正義が無く、女性がたたくと殺され続けている。これから政府にどのように責任を取らせるかが課題。夫が軍に殺されており、加害者に処罰を求めたい、そして土地問題の解決をしてほしい」

三月一七日(水) 朝アマリアの家に五人が集まりミーティング。

ペトロナさん「法廷の前に儀式をしたが、それで心が落ち着いていた」

ロサさん「法廷の前は、加害者に知られたらどうしようか、何かが起こるのではと怖かった。

だが、法廷に大勢の人が来たのを見て安心した。法廷では証言を聞いて苦しかったが、泣くのがまんなした。今は恐怖がなくなった。法廷の後体がきれいになったような気もちがした。法廷の成果が文書(宣告)になってとても嬉しい。その夜は皆で祈った」

テレサさん「証言を聞いた時には、当時のことを思い出してつらかった。帰りはずっと考えていた。夫を軍に連れ去られたまま、三か月もレイプされ続けた。乳飲み子を抱えて大変な苦勞をした。時間がたっても苦しみがずっと残っている」。そう言つて泣きだす。このプロジェクトに半年前に参加したばかりだという。

そのテレサさんを五年前から参加しているペトロナさんが慰める。「自分も以前はそうだった。けれどもこのプロジェクトに参加するようになってからはずいぶん楽になった。集まりの時、家族や生活のことはいったん別にして、気持ちを切り替えることができるようになり、それが役立っていると思う」。他の女性たちもこのプロジェクトに参加してからの経験を語ってテレサさんを励ましていた。アイデーも「苦しみを消し去ることはできないが、それに自分の人生を支配されるのではなく、その苦しみをコントロールすることができるようになる、このプロジェクトはそのためのものだ」といった説明をていねいにしていた。

マルガリータさん(アマリアのお母さん)「法廷はすべてうまくいったと思う。証言者が見えないように工夫したのは良かった。娘が名誉証

人として名前を呼ばれ、宣告にサインした時は娘の安全が気になった。法廷で加害者の名前を言えなかったのが悔しい。近くの村でのうのと暮らしているのを見ると怒りが湧き上がる。今でも苦しいことは苦しいが、前のようではない。以前は病気になる、強いショック状態が続いたが、そういうことはもうなくなった」

ここでの話を聞いて、参加して半年足らず(毎月一回の集まりなので、これまで五回参加したことになる)のテレサさんと、五年間やつてきている他の女性たちの違いに目を見張った。そして、プロジェクトでどれほど女性たちがエンパワーされているかも実感できた。

この集まりの後、私たちはアマリアの家族に別れを告げて出発。パンソスの町を通ってエル・エストルまで行く。エル・エストルのホテルに二泊する。ここはプロジェクトのミーティングに使う会場でもあるそうだ。こぎれいで、会議ができる離れがあり、プライベートも保護された格好の場所だということだ。

アイデーたちがマルガリータさんを医者に見せている間、私たちは町をぐるぐるする。エル・エストルはイサバル湖という大きな湖に面していて、美しいところだ。が、この一帯は近年麻薬密輸のルートにもなっていて、治安はどんどん悪くなっているという。

マルガリータさんの診察が終わった。今度妊娠すると母体が危険だと医者から言われたという。それについて夫と話し合うことなど、アイデーたちと少し話をしていった。後で聞いたとこ

ろによると、医者費用はプロジェクトの予算には入っておらず、今回のような場合は、緊急用に計上してある分を回すのだという。さいわい、ここにはE C A Pに協力的な女医さんがいて、いろいろと便宜を図ってくれるらしい。昼食後ホテルにチェックインして休憩。この日は集まりがなかったため、皆のんびりしている。

三月十八日(木) パンソス郡サン・イシドロ(八人)とホロム・ヒーシュ(二〇人)を訪問した。この二つのコミュニティはどちらも車の入らない山道を行かなければならない。車で行けるところまで行き、後は登りだ。

サン・イシドロはポルベニールというフィン



サンイシドロの集まり

力の中にある。一帯はカカオやコーヒーが取れ、ポルベニールもコーヒー栽培が中心。コミュニティの住民は一週間に三日フィンカのために働いて、トウモロコシや豆などを作らせてもらうのだというが、収穫の一部も納めなければならぬというのだ。

ここは半年前から参加している新しいグループで、とてもよく組織されている。夫がとても協力的なのが特徴だ。このプロジェクトに参加することになったのも、メンバーの一人の夫が話を聞いてきたのがきっかけだという。

このグループはゲリラのシンパだった。軍がやってくるのが分かった時、男たちは女性や子どもに危害が及ばないように山に逃げたのだが、それがあだとなった。男がいけない家はすなわちゲリラの家だと特定されることになったからだ。それ以前とは違って、焦土作戦と呼ばれる無差別で残虐極まりないゲリラせん滅作戦が展開されたため、女性や子どもも軍の標的となった。このグループの女性たちは、殺戮は免れたものの、コミュニティの中で「ゲリラの家族」として軍や自警団から拷問、レイプを受けることになったのだ。そして男性たちは、女性たちを守れなかったことをとても悔んでおり、そのために彼ら自身も苦しんでいるということだった。

ドミンガさん「法廷に満足している。多くの女性が犠牲になったことなど、問題が何なのかをもっとよくわかった」

エレナさん「聞いた証言は自分の心にもあ

るもの、本当に起こったこと」

レアンドラさん「法廷に行けてよかった。私たちは一つになったように思った」

カンデラリアさん「自分に起こったことをずっと話すことができなかった。プロジェクトに参加して初めて話せた。法廷では証言を聞いてとてもつらくて、涙が止まらなかった。が、自分たちの苦しみを分かち合えてよかった」

サン・イシドロの集まりが終わって、ホロミ・ヒーシユに向かう。途中、病気で伏せているメンバーのロサさんをお見舞いをしていく。ホロミ・ヒーシユはケクチ語でトラの頭という意味だ。これもフィンカの中にあるコミュニティ。週三日フィンカで働かなければいけないのだという。このグループは二〇人で、三年前から参加している。人数が多くて、一人ひとりの名前を確認することができなかったため、以下にいくつかコメントだけを抜粋する。

「証言を聞いて、つらかったが、同時に告発できて良かった。過去だけのことでなく、現在も起こっていることだ。強制排除時の性暴力は聞いていてつらかった」

「二月に東京女性法廷のビデオを見た(注2)が、おばあさんたちが証言しているのを見て自分も勇気づけられた。政府がどう対応するのか知りたい」

「参加したことに大きな意味があった。たくさんの方が支援しているのを見て勇気づけられた」……など。他に法廷に来なかった人のこと

や、集まりに来ない人への批判もあった。

アイデーの説明では、このグループにはネガティブな人が数人がいて、グループがなかなかまとまらないという。だが、陰でいろいろ言っていた人が、集まりの席で話すようになるという前進もあるという。

このコミュニティの状況も複雑で、最近盗難事件にからんでリンチ事件が起こった(真相はよくわからないが、元自警団や軍コミッションなど扇動しているケースが多い)が、後で警察が来て、調査もせず無関係だった人も含めていきなり数人を逮捕したという。その中にグループの女性も入っていたそう。首都近郊の刑務所に入れられているという。また、政



ミーティングの会場

府の補償プログラムに、レイプされていないのにレイプされたと虚偽の申請をして補償金を受け取った元自警団員の妻らについて、本当の被害者である女性たちの気持ちを逆なでしている。グループが団結していないうえにこのような事情もあり、このプロジェクトの活動も難しくそう。グループを続けるかどうかを含めて、今後の活動について話し合ってもらうことにした。

三月一九日(金) 朝ホテルをチエックアウトし、カステイジョ・サン・フェリーペという町に向かう。新しい参加者三人(母親のルムアルダさん、娘のイルダさんとフアナさん)に出会った。セアマンというコミュニティに住んでいたが、内戦でそこを逃れて、この町にやってきた。プロジェクト参加者に親類がいて、その紹介で彼女たちも参加することになった。

三人はプロジェクトに参加してまだ半年たらずで、月例ミーティングではまだ自分たちの体験は話せていないが、アイデーとプロモーターにはポツリポツリと語っている。娘二人は結婚して子どももいる。イルダさんは「今一二歳の娘がおり、娘を見ると自分が受けた苦しみを受けて育っていることを感謝せずにいられないが、同時に自分がこのくらいの年の時には……」と思っだしてしまおう」と言っていた。コミュニティから離されてしまっているが、町に住んでいるため、家の調度品などは他の女性たちより良く見えた。三人ともスペイン語を話すし、子どもにも教育を受けさせている。

訪問を終えて、首都に戻る車の中、アイデーが彼女ら三人に起こったことを話してくれた。姉妹は二三歳と一一歳だった。お父さんがコミュニティ・リーダーだったために軍に連行され、母と娘は軍に拷問・レイプされただけではなく「見せしめ」として、娘二人は裸にされ、村人の前で兵士らにレイプされる。しかもその後も裸で逆さに吊るされて半日さらしものにされたという。それを近隣のコミュニティでも繰り返して行われた。父親は瀕死の状態で家に戻され間もなく死亡。通常、軍によって連れ去られた者はそのまま「行方不明」になるのだが、彼女たちの父親の場合はむごたらしい拷問を受けたことを見せしめにするために死ぬ間際に戻されたらしい。やがてセアマンにも住めなくなり、三人は住みかを求めてさまようが、顔が知られているために近隣の村で受け入れてもらえなかった。さらに遠くの村で受け入れてもらえなかった。さらに軍がやってきて彼女たちの経歴を暴露し、見せしめの拷問・レイプをした。必死の思いでサン・フェリーペの町にたどりつき、何とか住みつくことができ、今日に至っている、ということだった。彼女たちが受けた暴力のむごさに慄然とする。

訪問を終えて

ECAPのチームと一緒に女性たちを訪問できたのは幸運だった。女性たちから法廷の評価を聞けただけでなく、彼女たちがどんな環境に住んでいるのかを知ることができ、チーム

がどのように仕事をしているかも見ることできたからだ。

心理学者のアイデーが女性たちと十分に理解しあい、信頼関係を築き、最善の形で彼女たちをサポートするためには、スペイン語とケクチ語の通訳でもあるプロモーターの役割が非常に重要となる。しかもプロモーターはプロジェクトの女性たちの連絡役、調整役、同伴者でもあり、女性たちと信頼関係を築いていなければならぬ。特にアマリアはプロジェクト参加女性たちの近くに住み、自身の母親も被害者でプロジェクトに参加していることもあって女性たちと緊密に結びついているのがよくわかった。アイデーとプロモーター二人のチームワークもよく、プロジェクトがうまくいっているという印象を受けた。

民衆法廷では、アナ・アリシアとアマリアはスペイン語とケクチ語の同時通訳も務めた。宿舎から会場に向かうバスの中でも法律用語の訳語など、ケクチ語にはないスペイン語の概念をどう訳すかとずっと検討していた。今回の法廷で画期的だったことの一つは参加女性たちのマヤ四言語（ケクチ、カクチケル、チュフ、イシル）とスペイン語の同時通訳があったことだ。この通訳を務めたのがプロモーターたちだった。参加女性たちのほとんどはスペイン語を話さないから、会場での質の良い通訳は必須条件だった。今回のフォロアアップで訪問した女性たちは皆、通訳があつたことを評価し、被害者証言、専門家証言、そして宣告の内容がよくわかって

よかつたと語った。

プロモーターのアマリアは今二八歳。このプロジェクトでケクチ語地域の参加者がとりわけ多いのは、アマリアの組織力によるところが大きい。「変革の主体」プロジェクトが始まる際に参加女性が見つからず困っていたところに、ECAPの秘密墓地発掘に関係していたアマリアを紹介されたという。アマリアは二週間であつた女性を集めた。その中には自分の母親もいた。お母さんが被害にあつたのはアマリアがおなかにいるときだった。お父さんは軍に連れ去られたまま、今にいたるまで遺体も発見されていない。アマリアは一五歳の時から被害者の会やコナビグアなどに参加して、秘密墓地発掘や補償問題などで活動してきたという。

法廷が終わった今、女性たちは今後どのようにプロジェクトを進めていくかを決めることになる。

注1 同行の男性グループ ケクチ地域からは、参加女性の家族・親戚の男性一人ほどがボディガードを兼ねて女性たちをサポートするために法廷に同行した。

注2 女性法廷ビデオ 昨年一二月にこの女性プロジェクトはより賞を受賞した。二〇〇〇年東京での女性法廷のビデオは副賞として渡された。そのビデオをグアテマラの民衆法廷の前に女性たちが見たことを指している。

郷愁のグアテマラー フリホレスともてなしの心

中川幸（上智大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科 地域研究専攻 博士前期課程2年）

二〇一〇年三月、人生で初めて中米・グアテマラに足を踏み入れた。海外旅行へは何度か行ったことがあったけれど、聞きなれない遠く離れた異国への訪問とあって、家族や知人からとても心配された。そんな周囲の心配に圧倒されながら、さらに飛行機の現地到着が一時間遅れ、自らの緊張感も一層募る中でその後約二週間にわたる滞在が始まった。

約二〇時間かけてたどり着いたこの国は、人



アナ・アリスアさんと

言葉、風景、異様に静かな夜の空気など、見えるもの、感じるものは日本とは異なっているけれど、不安な中でも「遠い異国へ来た」という特別な感覚を抱かせない、親近感のようなものを感じた。

そんなことを考えながら一日目の夜が過ぎ、翌日の朝食ではさらに親近感の湧くものに出会った。グアテマラ料理の定番、フリホレスだ。豆好きの私がグアテマラを訪れるとなつてかねてから楽しみにしていたことでもあった。私の故郷の徳島県ではいろんな料理に金時豆が使われていて（たとえば、お好み焼きやちらし寿司の具として使われるのが有名）、豆にはとても親しみがある。グアテマラのフリホレスも金時系らしく、ほっくりしていて、慣れ親しんだ金時豆と同じだと感動しながら、グアテマラを心に一層近く感じた。ただグアテマラでは香草と一緒に塩で煮込まれていて、甘く煮るのが一般的な日本と違って新鮮だった。

さて、続く今回のグアテマラ滞在では、レコムのメンバーに同行し先住民族の村落を訪ねるといふ貴重な機会をいただくことができた。私が訪れたところは首都から車で六〜七時間離れたところや、車で約四時間、さらに車を降りて山道を小一時間登ったところなど、進みながらこの先に人が住んでいるのだろうかと思ったりだった。そのどの家庭を訪問させてもらった時も、人びとは笑顔でハグとキスの挨拶を交わしてくれ、コーヒーや食事などを振る舞ってくれた。同居している三世代（くらい）の家族

を養うだけでも大変な、決して裕福とは言えない暮らしをしているし、水道の水は止まることもあつてとても貴重なものだ。そのような状況でも、真心を込めてもてなしてくれたことがとても感動的だった。

そんな人々の優しさに触れながら、再び故郷を思い出した。徳島県やその他四国の各地では、お接待（せつたい）と呼ばれる「おもてなしの文化」がある。これは、四国八十八箇所を巡るお遍路さんのために食べ物を振る舞ったり、道案内の看板や休憩所を設けたりする施しのことだ。私自信はお遍路になつてお接待を受けたこととはないけれど、四国のどこへ行ってもあちこちでお遍路さんや休憩所などを目にしながら、その心を感じてきた。このグアテマラでの先住民族の温かな心遣いが、おもてなしの心と同じように感じられた。彼女たちのほとんどはクリスチャンで、宗教は違うけれど、信仰からくる一つの共通した精神なのだろうかとも感じた。グアテマラでいれば故郷を想い、故郷にいればグアテマラを想う。フリホレスともてなしの心で通じる、そんな郷愁のグアテマラを発見した旅となった。

今回の訪問は、レコムの活動に同行させていただくことで可能になった。そこで経験したことで、出会った人々は、その縁なしに得られなかったものであり、本当に感謝している。この場を借りて関係者の皆さんに心から感謝申し上げたい。

グアテマラとの出会い

吉川真由美

(立命館大学産業社会学部三回生)

三月一日、〈好奇心と勢い〉だけで飛行機に飛び乗った私は、民衆法廷の開かれるグアテマラに向かっていた。〈先住民族〉でもなく、〈戦時下〉で〈性暴力〉を受けたこともない私が、どれだけこの問題にリアリティを感じられるのだろう、と正直、不安でいた。

性暴力を受けた女性たちと当事者でない私の距離感が変わり始めたのは、二〇〇七年の鉱山開発に伴う性暴力についての話を法廷で聞いたときだった。カナダのニッケル社が鉱山開発のために住民に立ち退きを迫った際、〈家を焼き払う〉などの暴力と同時に行われてきたのが女性への〈性暴力〉であった。それまで私はなんとなく、性暴力を〈戦争とセットの過去のもの〉と捉えていたため、〈内戦後(しかもたった三年前!)〉ということに私は強い衝撃を受けた。そして、グアテマラ先住民女性や従軍慰安婦に対する性暴力も、戦争の道具としての暴力、その暴力のひとつの形としての性暴力であるから、世界中どこでも起こりえる極めて現代的な問題であるのだと認識を改めた。〈戦時下の暴力〉を考える事は、現代を生きる私たちの〈日常の中の暴力〉を考えることと決して無関係でないと言う当たり前だが重要なことに気づいた

のである。

また、法廷後に訪れたキチエ県で出会った人々の姿が強く印象に残っている。私たちは、修道女のマルーカさんが立ち上げた「希望をほぐくむ女性たち」協会がプロジェクトを進めている三つの村を訪ねた。プロジェクトは主に内戦被害者女性で運営され、マイクロクレジットでどうもろこしすりつぶし機を購入しお金と機械の管理を工夫している村や牛を購入しミルクやチーズを売っている村など、それぞれのコミュニティにあった方法で生活再建と向上を図っていた。「以前は、人前で意見を言える女性性は少なかった」のが信じられないくらい、どこに行っても女性たちは自分の内戦中の体験や今の生活についてハキハキと話をしてくれた。その中でも、特に印象的だったのは、マルーカさんをはじめ二日間にわたって私たちを村々へ案内してくれた「希望」協会の役員を務める女性たちの姿である。「小学校三年までしか行けなかったけど、その後ラジオ講座で卒業して、看護師の資格もとった。自分のできることが少しずつ増えるのがうれしい」「マルーカと月に一度、勉強会をするうちに人前で話ができるようになったし、何が大切かわかるようになり世界が広がった」「今までつらい体験をしてきたが、今は新しい人生がスタートしている」。私は女性たちの〈力強い姿〉に、紙の上の文字以上の〈人間の尊厳〉を見たような気がした。そして、人間が〈尊厳〉を取り戻し〈主体者〉と

して生きること、グアテマラ社会の可能性を感じた。

ある女性が言った「私たちの痛みを共有してくれてありがとう」という言葉が忘れられない。それまで「経験しない限りその痛みはわかり得ない」と、どこかで思っていた私(非当事者)と当事者の間には乗り越えられない決定的な溝があったように思う。今になって「当事者にはなれないし本当の意味で痛みはわからないけれど、私はあの時、彼女が言葉に託した〈想い〉を確かに受け取った」のだと気づく。リアリティと当事者性の問題は、当事者の思いや言葉を受け止められるかという関係性の問題なのだと思う。私はグアテマラでたくさん人の〈想い〉を確かに受け取った。そして、受け取ったものとの関係をこれからも大切にしたいと思う。困難な課題もたくさん残る中、人々が記憶と尊厳と取り戻し前進し始めた二〇一〇年、グアテマラとの出会いは衝撃的で、圧倒的で、そして嬉しいものだった。

最後に、右も左もグアテマラの位置さえ知らなかった私にいろいろ教えてくださった頼もしい先輩方、新川さん、智子さん、修子さん、幸ちゃん、そしてグアテマラ行きを誘ってくださった岡野内さんに心から感謝いたします。

「グアテマラ支援の検討報告」(124号) についてののお詫びと補足

四月発行『そんりさ』124号に掲載したグアテマラ・コナビグア支援についての記事を掲載しました。この内容について、以前レコムのグアテマラ支援に関わっていた方より質問と指摘をいただきました。それに対する運営委員会の考え方をここで説明したいと思います。

指摘は主に、記事の中でグアテマラ基金によるコナビグア支援をやめる理由の一つとして「組織としてのコナビグアは明確なヒエラルキーを保持し、頂点の運営委員会が決定し、それが下へとおろされていきます…支持する側…される側という構図がずっと残ってしま…」という表現があったことに対するものでした。レコムとしてコナビグア支援を決定した時は、コナビグアがそのような組織であったという認識はなかったし、コナビグアが上から指揮されて運動を作ってきたのではない、との指摘でした。

コナビグアが設立された詳細な経緯や組織の在り方が当初どうであったか、私たちも十分把握しているわけではありません。ですから「明確なヒエラルキーを保持し…」という表現であったかも設立当初からそうであったかのように表現したことは不適切でした。ここにお詫びいたします。

コナビグアが設立された当時はまだ内戦状

態で、軍の弾圧をやめさせ、強制徴兵に反対し、平和な社会を築くというコナビグアの活動そのものが非常に危険な状況でした。それにもかかわらず、全国で一人以上のマヤ女性たちが結集し文字通り命をかけて活動したという事実は、コナビグアの訴えが内戦の被害を受けた多くの先住民女性性の要求と一致していたから他なりません。だからこそレコムはコナビグアへの支援を始めたわけですし、その闘いに社会変革の希望を見出したのでした。コナビグアは広範な地域の女性たちの声を集めて運営委員会で戦略や活動を決定し、地域レベルの活動をバックアップしながら運動を効果的に展開し、その中でリーダーが育ってきました。そしてレコムの支援は彼女たちの活動に貢献したと自負しています。

その後、内戦が終わり、コナビグアが組織の硬直化という問題、多様化した地域の声に応えきれないという問題などを抱えるようになったことは、レコムでも以前から認識されており、支援組織としてのレコムがどう対応するかという点も検討されていたのでした。そしてコナビグアという組織と地域の女性たちのつながりを取り戻し、地域レベルの組織やリーダーを強化するプロジェクトも実施したのですが、残念ながら問題解決につながる成果を出すには至り

ませんでした。その後運営委員の交代などでのような問題点の引き継ぎがうまくなされず、教訓を生かすことができないまま昨年支援見直しまでできてしまったことは、現在の運営委員会として深く反省しなければならぬことでした。この点を皆さんにお伝えしきれなかったこともお詫びいたします。

このような反省から、レコムの限られた支援を最大限に生かすために、全国組織であるコナビグアから、キチエ県の地域組織である「希望」をはぐくむ女性たち「協会」と、今年から支援先を変更したわけです。「希望」協会は三五〇人のマヤ女性が参加しており、マヤ女性としてのアイデンティティを強化しながら、エンパワメントや経済的自立のために、コミュニティの中から地域の現実に根ざした活動を通じて、貧困と差別のないよりよい社会の創造を目指しています。小さな組織なので、レコムと運営委員会との意志疎通もしやすく、全体の動きがよく見えます。これまでの視察報告でもあったように、参加する女性一人一人が確実にエンパワーされていることと、レコムが通常支援できる程度の金額でも十分にインパクトをもちうるだろうというのがこの協会を選んだ理由です。グアテマラ支援がどのように進むかは、今後『そんりさ』紙上などで定期的に共有していきたいと思えます。グアテマラ支援に関わってくれる方も募集中ですので、今後ともどうぞよろしくお願いたします。

(運営委員一同)

EUと米国の自由貿易協定、コロンビアの

牛乳生産を直撃

ホルヘ・エンリケ・ロブレド 訳 山本昭代

インドのある農業大臣が来世で何に生まれ変わりたいかとたずねられた時、こう答えたという。「ヨーロッパか北米の牛になりたい。それらの国の牛一頭はインドの農民一人より多くの国の補助金を得ているから」。この皮肉は、アメリカ合衆国とEUヨーロッパ連合が、農畜産業にそれぞれ年間約七〇〇億ドルという莫大な補助金が投入する一方で、他国に対しては農業分野での保護を撤廃するよう強要していることをあてこすっている。

信じられないかもしれないが、コロンビア政府はすでにアメリカ合衆国との間と同様、EUとの間でも自由貿易協定に調印し、保護の撤廃に合意したのである。協定が及ぼす打撃について、コロンビア農業経営者組合代表のラファエル・メヒアは、「EUとの自由貿易協定において、農業部門でコロンビアは非常に不利な状況にある。乳業で生計を立てている四五万世帯が危機的状况に陥ることになる」と述べた。コロンビア畜産業者連合代表のホセ・ビセンテ・ラファウリエによれば、酪農家の大部分は「自由貿易協定が施行されればもはや生き残れない。文字通り地図上から消し去られてしまうだろう」と

言う。牛乳生産者全国連合は、「国内で最低買取価格を保証していた保護がなくなれば、補助金付きで生産された外国製品と競争することなど不可能だ」と述べる。またカルダス州の牧畜組合は、「国内生産者が保護され、輸出に補助金が出るなど、市場操作が行われている国から輸入された粉乳やチーズ、乳清がわが国の市場に雪崩のように押し寄せ、国内の牧畜部門は荒廃し、酪農家は壊滅してしまう」と述べた。

コロンビアでは、牧畜業に従事するのは大部分が貧困層と中間層である。四七万三千戸の牧畜業者のうち、四八％に当たる二二万六千戸は一〇頭以下、平均で五頭の牛しか所有せず、八九％に当たる三八万七千戸は五〇頭以下しか所有しない。それに加えて寒冷地では、「自由貿易」によって小麦も大麦も壊滅させられ、果物も競争力が落ちたため、牛乳は最後に残った有望な生産物である。米国との自由貿易協定で、野菜生産も打撃を受けるとみられている。

予測されていたように、このように批判を受けていたにもかかわらず、コロンビア政府はEUの強引な要求を拒否することなく、協定において些細な修正を申し入れたにとどまった。そ

れは壊滅的被害を食い止めるためのものではなく、むしろ牧畜業者とコロンビア国民を丸めこむためである。政府は酪農セクターの「再編成」を指すとしているが、これもごまかしである。米国との自由貿易協定を締結した際に、農家に対する所得補償制度をつくり一部の政治家と組合を取り込んだが、それと同じ手口である。

EUとの自由貿易協定はコロンビア国民には隠れて交渉が行われ、その目的は原乳の取引をなくし、大手乳業メーカーが有利になるようにと画策された。コロンビアではそのような大資本が、欧州や北米からの乳製品の輸入によってもっとも多くの利益を得ることになるのだ。原乳の取引がなくなることによってまた、現在乳業メーカーに原乳を売っている酪農家は買い手を失い、大手メーカーはさらに支配力を増すことになる。国内の生産者は補助金によって安価に生産された欧州の乳製品の流入との競争を強いられる一方で、輸入も行う大手メーカーは国内生産者と取引を行う必要がなくなるからである。さらにヨーロッパの乳業多国籍企業が、国内マーケットのまだ支配されていない部分を独占することになるのは明らかだ。

EUとの自由貿易協定の影響に関して、リカルド・アルグエジヨが二〇〇七年に行った調査によると、コロンビアの国内生産は、製造業を含め三二の部門のうち三〇部門において縮小するとみられる。農業部門においては牛乳だけでなく、米は輸入によってすでに深刻な危機にあり、さらに植物油や食肉も打撃を受ける。バナ

ナと砂糖に関しては、ヨーロッパへの輸出は大幅に拡大できるはずだが、コロンビア政府はEUへの輸出関税を完全撤廃はしないことに合意した。つまり、ヨーロッパの多国籍企業を保護するため、「自由貿易」はけっして行わないというのである。なんと卑劣なやり方がまかり通ることか！

現政権は農産物輸入を六〇〇万から

一〇〇〇万トンにまで増加させ、自由貿易協定を締結して国民の食糧をますます外国に依存させ、従属国家としての状況をさらに悪化させたことで、未代まで記憶されることになるだろう。今後、農業生産者組合の執行部らが組合員らの側に立ち、EUとの自由貿易協定を断固として拒否するのか、あるいは米国との協定の際のように受け入れてしまうのか、その動向が注目

されている。

(二〇一〇年三月三〇日、ボゴタ)

―ホルヘ・エンリケ・ロブレドは、革新民主党の上院議員である。

<http://alainet.org/active/37146LAI, America Latina en Movimiento> ㊦

アメリカ合衆国にとっての コロンビアの軍事的的重要性

カルロス・チリノス
(BBCワールド)

|| 佐々木玲子訳

アメリカ合衆国の政界では、麻薬との戦いにおけるコロンビアの重要性は高く評価されている。米国が使用していたエクアドルのマンタ基地が二〇〇九年九月に返還されたが、それに代わるものとしてコロンビアの基地を使用するという協定が米国とコロンビアの間で交わされた。だが、米国政府や議会はこの新協定が地域にもたらす影響を過小評価していたようだ。

一九九九年に麻薬およびその背後のいわゆる

「麻薬ゲリラ」と戦うために、主に米国の出資によるコロンビア作戦が始まって以来、米・コロンビアの軍事関係は批判と疑念の的になって

きた。米国の政界および軍関係者は、麻薬との戦いと西半球の安全保障の枠組みの中で、コロンビアの重要性を評価しているが、地政学的に考えると、事はさらに複雑だ。ベネズエラやエクアドルのような露骨に反米姿勢をとっている国による非難(米国はベネズエラに侵攻するために基地を使用するのではないか)に加え、ブラジルやチリのような同盟国からも批判が起こっているからだ。

「米軍基地ではない」

二〇〇九年八月五日、コロンビア国防省大臣

兼軍総長は、カルタヘナで行われた西半球軍事サミットの最後に「外国軍部隊が利用する可能性があるのは、米国の基地ではなく、コロンビアの基地である」ことを明らかにした。同サミットで米南方軍司令部長官は、「基地に何が配置されるかは、コロンビア次第だ」と述べ、コロンビアにおける米国軍の活動は「とても開かれた、米国議会と連携のとれたもの」だと念を押した。ベトナムで起こったように、米国軍が彼らに無関係な外国の紛争に関わらないよう、米国議会は八〇〇人の軍人と六〇〇人の民間人の上限としてコロンビアに派遣し続けており、部隊の数や兵士の増員など、この新協定をもって事態が変わることはないという。

不必要な基地

二〇〇八年一〇月にアメリカ会計監査院(G

AO)の報告は、麻薬戦争〈コロンビア作戦〉は予想された結果を出しておらず、戦略の変更が必要であると判断し、米国が担っている同計画の財政的責任および実施をコロンビアに委譲するような「国有化」を進めるべきだと提案した。だが、コロンビア・米国共同の新規軍事計画はこの提案とは正反対の方向に向かっているようだ。計画についての情報がないことも批判されている。

コロンビアへの新たな駐留の目的について、「事前に明確化」していなかったことは米政府も認識している。二〇〇九年七月ホワイトハウスの国家安全保障顧問ジム・ジョーンズ将軍がブラジルを訪問した。ブラジル大統領府国際関係顧問は、会談ののち、「両国政府の時機を得た『事前の明確化』があれば、一切の疑念は払拭されたかも知れないが、事態は悪い方向に進

7つの基地

米国軍がコロンビアで使うのは以下の七つの基地

- ・カルタヘナ (カリブ海沿岸)
- ・カケタ県ラランディア (南部)
- ・クンディナマルカ県トレマイダおよびパランケロ (中部)
- ・マラガ (太平洋岸地域)
- ・メタ県アピアイ
- ・マランボ (大西洋岸)

んでいる。」と述べた。米国のNGOワシントン・オフィス・オン・ラテンアメリカWOLAによれば、コロンビア基地に米軍が駐留する必要はなく、「もし米国が麻薬戦争で、麻薬を積んで自国へ向かってくる航空機の追跡をするだけなら、基地使用权を持つ必要はない」はずだ。そして、これまでの歴史的事実を見れば、ラテンアメリカにおける(米軍)基地の存在は地域の紛争を意味するだろう」ということだ。

目標はベネズエラ？

米国軍が使用できる基地は、いずれもベネズエラとの国境に近くはないが、ベネズエラ政府は同地域にもたらされるであろう「軍事的不均衡」について警告し、米軍のコロンビア駐留に反対している。が、今回の新協定が、「政治的には不都合」であっても、「ベネズエラへの侵攻の前触れ」になるだろうという見方は少ない。

http://www.bbc.co.uk/mundo/america-latina/2009/08/090806_2113_bases_colombia_analysis_rb.shtml
より要約

連載第三六回 『ラ米百景』

伊高浩昭(ジャーナリスト)

第54景

ディアスポラ文化論

「ディアスポラ」という輸入言葉を日本の学者が頻繁に使い始めたのは、一九九〇年代の終わりごろか今世紀の初めごろだっただろうか。異境で長らく暮らす異邦人や異民族などを意味する言葉で、よく例として挙げられるのがユダヤ人だ。現在の彼らの祖国がイスラエルだとすれば、その域外に住むユダヤ人は国籍を問わずディアスポラだと解釈される。沖縄人について言えば、ハワイや南米に数多く散らばっている移住者やその子孫は皆、ディアスポラだし、日本本土定住者もディアスポラなのだ。彼らは、たとえば南米在住者ならば、沖縄民族として、また日本国籍保持者(日本人)として二重にディアスポラである。沖縄人が、自分たちの居住圏(現在は沖縄県)に住みついたヤマトンチュ(本土日本人)をヤマト(日本)のディアスポラだと捉えるのも、ごく自然なことなのだ。ならば、北海道と東北地方を居住圏・生活圏としていたアイヌ

民族から見れば、そこをほぼ完全に占領し尽くしているシヤモ(日本人)は本来、ディアスポラだろう。だがアイヌ民族が少数派に追いやられて、今では日本全域に散らばるディアスポラになってしまっている。彼らは北海道では幾つかの地でも、民族の誇りと認同を維持しつつ生きている。このように見れば、ディアスポラ論は複雑で多岐にわたり、とどまることはない。

交通機関や通信手段が発達している今日、誰もが簡単にディアスポラの立場に身を置くことができる。私は一九六七年にメヒコ市を拠点にラ米取材を始めた時から八年あまり、メヒコないしラ米に身を置くディアスポラだった。その間の生活や仕事の体験があまりにも新鮮かつ興味深く、私の世界観(コスモ・ヒシオン)の土台になってしまったため、生まれ故郷の東京に戻った時、自身を「精神的、文化的にメヒコ人ないしラ米人のディアスポラ」とさえ思ったものだ。もちろん当時は「ディアスポラ」という言葉の使い方を知らなかったが、それが意味する立場に精神的、文化的になつていたのは紛れもない事実だ。肉体的には日本人だ

が文化的イデンティター(認同)アイデンティティ(世)は、もはや完全には日本人でない、言わば(日系二世)のような立場だった。日本の(偽りの和)を求める集団的社会に強烈な違和感を抱き、それは今日までも続いている。

その後も沖縄に三年住み、ヤマトンチュのディアスポラとして過ごしたし、南アフリカでも三年あまり(名譽白人)という不名誉極まりないディアスポラとして過ごした。さらにブラジルで四年ディアスポラだった。かれこれ二〇年近く地理的にディアスポラ状態にあつたわけで、私のイデンティターは、日本人を基盤にラ米、イペリア半島、沖縄、アフリカなどに影響を与えた地域の認同をこちゃ混ぜにした(多民族的・多文化的なもの)になっている。私は、住んだ国々や地域の人々との交友や、そこで出会った異邦人とのディアスポラ同士の交友を通じて、多くを学び薫陶された。だから、異境が大好きであり、異境の持ち味を我が認同に加えようと、ついつい真剣に努力してしまふ。

そんな私にとって、『ラテンアメリカン・ディアスポラ』(明石書店、二〇一〇年一月刊)という本は興味深い。この本は、ラ米好きの『そんりさ』読者ならば読了済みの人が多いだろうが、私には、米国在住の「ラティーノ」についてのディアスポラ的分析が面白かった。ラ米学徒ならば、読むべき参考書の一つだろう。日本で公開中の映画「シン・ノンブレ」(名無し)は、中米からの米密移住者と、かつて米加州で育ち中米に戻ったイデンティター喪失者の青少年が組む犯

罪暴力団「ラス・マラス」の交錯する筋で、ディアスボラという観点から興味深い。

ラ米は、〈域内ディアスボラ〉が最も多い地域の一つだ。西語が中心の言語であるため、特に知識人は域内どの国においても仕事に容易に就けるのだ。域内を互いに亡命地として提供し合っているラ米人は、まさに「大なる祖国」(パトウリア・グランデーラ米、パトウリア・チキータ(小さな祖国Ⅱ自国)や、「我々のアメリカ(又エストラ・アメリカⅡラ米Ⅲ米州)」というラ米の理想を現実のものにしている。私は、数多くのラ米人(域内亡命者)に会った。たとえば、サルバドル・アジエンデ(クーデターで死んだチリ大統領)の夫人オルテンシアは長らくメヒコ市で亡命生活を送った後、祖国に帰還し、民主化過程で象徴的指導者となった。ボリビア人民政権の大統領だったフアンホセ・トレス將軍には亡命先のブエノスアイレスで会ったが、亜国が軍政になるや暗殺されてしまった。メヒコに亡命していたブラジルの農民運動家フランシスコ・ジュリアンは、後に母国に戻って政治活動に復帰した。独裁政権から迫害されてラ米の国々に亡命していたジャーナリスト、芸術家、学者らは、亡命先のメディアや大学で働きながら帰国の機をうかがっていた。コロンビア人作家ガブリエル・ガルシア・マルケスは、メヒコに移住しており、偉大な域内ディアスボラの一人になっている。メヒコに移住した亜国人詩人フアン・ヘルマンもかりだ。

イスパノアメリカ(西語系ラ米)とスペインは広い意味で〈域内〉と言えるだろう。スペイン内戦を逃れて大挙してラ米に亡命したスペイン人は、ラ米各国の

文化を向上させ経済建設に貢献した。故国の経済破綻に直面した現代のラ米人は、スペインに逃れ住みつく者が多い。このラ米(イスパノアメリカ)とスペインの関係は、日本と、南米諸国の日本人移住者の末裔との関係にやや似ている。一九八〇年代末から数多い日系ラ米人が出稼ぎで日本に流入し、今日、日系ディアスボラ社会を形成している。そこでは、「エストイ・ガンパッテヤンド(私は頑張っている)」というようなディアスボラ語が使われている。

日本人のラ米ディアスボラは、コロシア・ハポネサ(日系人社会)、日本人会、日系人会、二世会、県人会などをつくって認同を維持しようとしている。ラ米で最も有名な日本人ディアスボラだった演劇家の佐野碩は、メヒコ市で長らく亡命生活を送り、当時の世界で最も進んでいたとされるロシア流の演出をメヒコに植えつけ、ラ米全域の演劇界に影響を及ぼした。その死の半年後にメヒコに行った私は、残念ながら会えなかったのだ。トロツキーもロシア人のディアスボラとしてメヒコ市に亡命していたが、スターリンの刺客に暗殺されてしまった。私は、その孫に会った。孫は立派なメヒコ人だったが、ロシア人のディアスボラでもあり、ソ連政府を恐れていた。

私は、人は誰でも人生に一度はディアスボラとして異境に生きるべきだと思う。戦争を任掛けて占領した土地に住みつくのや、他国を植民地にして住むのはいけないが、他の多くの場合はディアスボラになることが許されるだろう。ディアスボラ体験を持てば、偏狭な国粹主義・国家主義、自民族・国民優越主義、排外

主義などに与することはなくなる。今日、多くの日本人が海外旅行に出掛け、たくさん外国人が来日し、日本に定住する外国人も少なくない。これらは、ディアスボラ交流の上、あるいはディアスボラ文化の形成上、素晴らしいことだ。日本人はかつて、外国人との結婚を〈国際結婚〉と大袈裟に呼んでいた。今日、そんな呼び方をする日本人は少ない。個人同士の結婚にすぎないことを、多くの日本人が理解したからに他ならない。日本人はこの点でも、文化的に進歩したのだ。

日本のカトリック教会は、隠れキリシタンの時代はさておき、明治以来、〈知的・文化的エリート〉の宗教という認識をある程度伴っていた。ところが一九八〇年代末からの、大方が生来のカトリックであるラ米日系人やフィリピン人らの大量出稼ぎ者の来日で、日本のカトリック教会は変容を迫られた。仲間内の宗教的会合の場ではなく、庶民の日常的な祈りや信仰の場としての万人の教会に脱皮しなければならなくなったのだ。これは、日本のカトリック組織の幹部だった神父から聞いた話である。かくして、日本のカトリック社会も〈孤高な伝統〉から脱皮して進歩したのだ。

自らディアスボラ体験を積み、ディアスボラである他者に寛容に対応する——これがディアスボラ文化の基礎である。この文化が広く深く浸透すれば、日本は真に住みやすい国になるだろう。

「ラ米」の歴史 身近に伝える取材帖 阿波弓夫

伊高浩昭は、生まれも育ちもラテンアメリカ（以下ラ米）という、日本ジャーナリズム（以下JML）史上極めて特異な存在です。メキシコで記者活動を始める一九六七年から約四〇年間、ラ米圏外にいた数年間も含めて意識はラ米一筋という、この徹底ぶりを抜きに本書『ラ米取材帖』は語れません。既存の日本JMLでは、

同氏のような息の長い付き合いは制度的にも困難であり、通常は間欠性を帯びた歴史的視野のせまいものにならざるを得ません。そうしたラ米JMLの限界を突破する同氏の活躍ぶりは、努力と、同地域への愛情の深さによるものと言えるでしょう。そうした背景からか、筆者は本書を読みながら、普段縁遠い太平洋の彼方の「親戚」のことをこれほどまでに熱く執拗に語れる

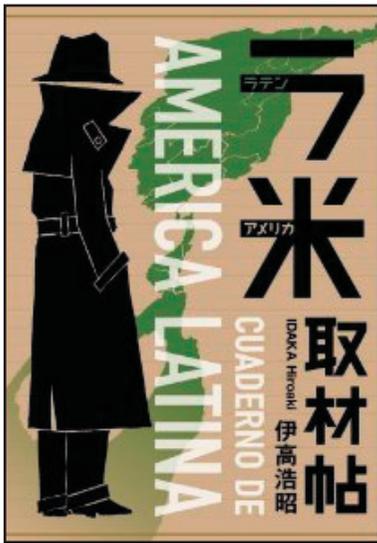
のは一体何故なのか、何度となく考えたものです。著者に取り憑くラ米の魅力の正体をつかみたいという気持ちを持ちました。

本書の内訳を通過しておきましょう。アルゼンチンを皮切りに、ラ米一七カ国を踏破していきます。これら二四本の記事は、二〇〇七年に記者活動四〇周年を期して月刊ラティナー誌に発表されたものを加筆修正の上、今年同誌より上梓されたものです。まさに伊高浩昭的ラ米世界の集大成です。今後この「取材帖」は継続されるのでしようし、現代ラ米論、ラ米JML論という形でラ米三部作としていずれ発表されると思われます。全体としては「二一世紀ラ米世界像」へと収斂していくものと考えます。ですから、筆者のように本書を読んで新発見に驚いてばかりいる者には行間を語るなど無理な話です。むしろ、読者一人一人がじっくりと時間をかけて、本書と対話されるとよいでしょう。

およそいかなる人であれ、少しでもラ米世界と関わりのある人なら、情報の量質ともに欧米のそれに比肩する本書は一読の価値はあるでしょう。ラ米の人々が一体何を求めているのかが行間から伝わってきます。若い人が読むと、劇画タッチのハードボイルド小説物に近いラ米イメージを持つかもしれません。地理的にも遠い国のことを間近に感じるための苦闘の末の工夫であることに気づくでしょう。筆者にも注意して読まねばならないところがありました。パ

ラグアイに亡命したニカラグアの独裁者ソモサがカストロの意向をくんだコマンドによって爆殺されたことなど、ラ米政局における謀略説の比重の大きさは無視できない。言うまでもなく、政治はきれいだとはありません。本書はラ米世界に理想を求めるわけでも、各国が直面する大問題に解決策を示唆するためでもなく、事件の輪郭とその問題の核心を、生活する文明圏を異にする私たちに理解しやすいように、直接の当事者の発言も加えて記録しているのです。

最後に見当違いを恐れずに言いますが、最終章ですが、筆者はチリ人劇作家ドルフマンの最近の発言を引用してラストフレーズとしています。それはピノチェー長期独裁を支えたのは、彼の「恐怖政治におびえるチリ人だった」と自らの不甲斐なきを告白している点についてです。著者はこれをかき強引に日本の権力構造に関するアナロジーとして添加してしまっています。読み手からすると、少し唐突な感じがします。急に日本に視線を移さずとも、政治と文学との関係、あるいはチリをめぐる世界的連携の問題など、ドルフマンの考えをラ米世界の抱える共通の問題状況の内に受け止め直して議論された方がよかったです。ドルフマンの気持ちはそれとして、筆者はチリ人だけを責める酷な話だと思えます。一体世界中のどれほどの国がちゃっかりとピノチェーと友好関係を保ったとか。そのピノチェー在任中は好きなチリワインを断った人を知っています。チリの人にはどちらのこともしっかりと記憶に止めていることでしょう。





レコム フォトコンテスト1位 「ラ・ファミリア」

柴田 大輔

早朝、まだ群青色の深い谷の、家々の屋根から煙が立ち上る。かまどの周りでは家の女性達に混じり、若いお嫁さんも朝食の準備をしている。この日の朝食はジャガイモのスープ。甘いコーヒードを体を温めながら、手際良く石ころほどのジャガイモの皮を剥いていく。大人数の食



事の準備は大変だ。

早起きの男の子が「チュツチュツチュ」と唇を震わせ呼びかけながら、裏山から畑へ連れて行く馬をひいてくる。前日のミンガ（村の共同作業）で道路の整備をしてきた大人の男たちは、仕事後のチチャ（サトウキビ酒）で遅くまで盛



り上がったようだ。ポーとした顔つきのまま、冷たい水シャワーを浴びに行く。

この日一緒に畑へ行く親戚たちも集まり、思い思いの場所で、揚げたバナナをかじり、ジャガイモがたっぷりの器一杯のスープで手早く朝食をすます。

馬に鞍をかけ、「ようし、そろそろ行こうか!」とさつきまでぼんやり顔だった主の元気な声に、農具を担ぐ力強い足取りが続いていく。



コロンビア・エクアドルの訪ねた先々で、繰り返し返される日常に生きる人たちに、人間としての力強さを感じました。彼らが守ろうとしているもの、もう一度取り戻したい生活がそこにあるのだと思います。時には血を流してまで立ち上がる人々の背景をもっと見ていきたいと思っています。

この度はこのような賞をいただきありがとうございます。ございました。



音楽三昧♪ペルーな日々(第34回)

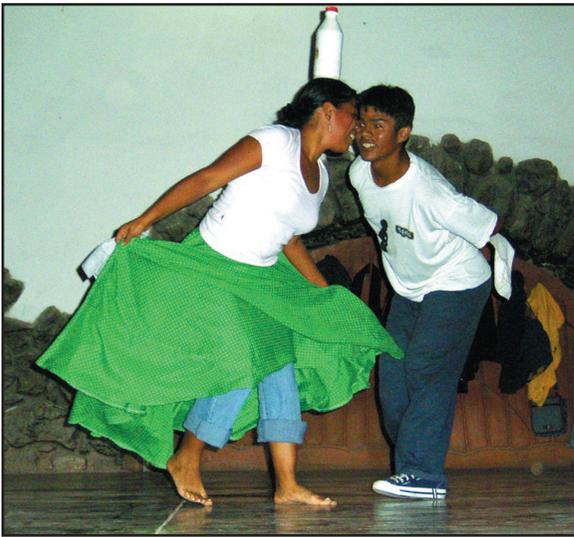
「トンデーロの魔術的魅力」

ペルー北部を代表する踊りの一つに、トンデーロと呼ばれる踊りがある。豊み掛けるように繰り返される低音弦のベース・ラインに、きらびやかに転がる高音弦が絡み合う。カホンのリズムがガツンと曲のテンションを上げる

と、いよいよコプラと呼ばれる四行詩に載せた歌が妖艶に始まる。それを待っていた褐色の肌美しいペアが、ハンカチを右手に腰をかかめて裸足で地を這うように踊る。同系統とされる国民舞踊マリネラが、どちらかというと粋な男女の恋愛表現の美学を表現しているとするならば、トンデーロではより直接的で濃密な男女の恋愛が表現される。ぴつたりと寄り添ったり、つれなくしたり、まさに振り付けも変幻自在。踊り手は即興の駆け引きの中で、まさに成就したり破綻したりする恋の運命をドラマ仕立てに描き出すのだ。このトンデーロのリズムはちよつとゆつたりめの八分の六拍子。曲調はねつとりと絡みつくと言えよいか。これが地を這うようなステップとぴつたりと合うのだ。曲の前半部では女性はチチャ壺やマンタ(シヨール)などの小物を使ったりするのの特徴の一つだ。古くはアルパ(ハーブ)

が使われていたようだが、近年はギターで演奏される。打楽器はもちろんほとんどの場合カホンだが、チエコと呼ばれる北部特有の瓢箪楽器も稀に使われる。

トンデーロはいい!ともかく文句なしに好きだ。と、まず個人的な好みをぶちあげてしまつてから今回の紹介に入りたい。イントロの低音がズンズンと鳴り始めるだけで心が波立ち、高音弦が入ってくるとときめいてしまう。そんな(少なくとも個人的には)魔術的魅力を



持つ音楽ではあるが、その起源は謎に満ちている。

このトンデーロはペルーの最北に近いピウラ県でもっとも盛んな音楽で、モロポンというちよつと愛らしい名前の町がその揺籃の地であつたとされる。トンデーロのゆりかごとか、首都とも呼ばれる町だ。そのため、モロポンを歌つたトンデーロの曲は多い。

この踊りはペルー北部のピウラ県とその南に隣接するランバイエケ県を中心とする農民の踊りで、もつとも一八世紀中頃の記録が最も古いとされている。それ以前の歴史はよくわかつておらず、いろいろな説が立てられている。なかなか面白いものもあるので少しだけ紹介したい。

まず、幻とされる北部の先住民音楽であつたパバ(七面鳥)の踊りを起源とするものだ。すでに伝統の絶えた先住民の踊りで、ピウラ県などのチチャ(とうもろこしのどぶろく)の祭りでも踊られたそう。収穫の儀礼として男女のペアで踊られるが、性的な表現が非常に強く、最後はベッドで踊り終わるとも言われ、夫婦以外で踊ることは認められなかつた、という刺激的な話が残っている。

次に、ランバイエケ県の黒人集落サーニャに今も残る古い音楽ルンデーロが、同県の人々が主張するトンデーロの起源であるとする説だ。ルンデーロは曲の中盤までコプシをきかせて伸びやかに自由に歌われるが、曲の終盤はテンポアップして賑やかなコーラスでリズムカルに歌

われる。この最後の部分が独立したのがトンデーロだという説である。このルンデーロの代表曲サーニャは、スサナ・バカやエバ・アイジョン、ヘスス・バスケスといった大物音楽家の録音もたくさん残っているのので、機会があったらぜひ聴いてみてほしい。

はたまたマダガスカルの人音楽が起源であるという説もある。これについては、なぜマダガスカルなのか、マダガスカルは何の踊りが起源であると考えられているのか不明であるが、非常に刺激的な説だ。

トンデーロは今でもペルー北部海岸地帯を代表する田舎の踊りとして絶大な人気を誇っている。マリネラ・ノルテーニャの踊りはコンクールの中で都市的な華やかさや洗練された技術をブラスバンドの伴奏に合わせて発展していった。一方トンデーロは、ノルテーニャのような粋や派手さはないが、地方ならではの気取らない率直な感情表現が、ギターやカホンによるまわりつく音楽に乗せて即興で表現される音楽として今なお生きている。

トンデーロの歴史的名演を上げると、例えば「明日イカへ行く」(アロシア・マギーニャ)や「ラ・アマカ」(ロス・トロバドール・ス・デル・ノルテ)、「チーラの真珠」(マリッツァ・ロドリゲス)、「神はトゥルヒーヨに生まれた」(ヘスス・バスケス)などが比較的手に入りやすいレパートリーだろうか。また、最近の名演では、例えば「愛のコプラ」とトンデーロ(オルガ・ミー

ジャ)や「モロポン・デ・サンミゲル」(フリーエ・フレウンド)、「デ・ラ・ミスマ・サンダレ」(ルシ・アビレス)なども、トンデーロの魅力を余す所なく伝える作品として忘れてはいけないだろう。ちなみに日本でも手に入りやすいものがあるなら、スサナ・バカやペルー・ネグロがカバーしている「スペインからキリストが着いた」が面白い雰囲気だ。

つらつらとトンデーロについていろいろ書いてきたが、その魅力が少しでも伝わっていたら嬉しい。一見似ているとされ、現地でも混同されることもあるノルテーニャとトンデーロであるが、明快な華やかさで魅せるノルテーニャに対し、トンデーロはムシカ・マヒカ、つまり呪



術的な魅力に満ちた音楽と呼ばれる。トンデーロ独特のねつとりとした曲と踊りが、魅入れられたかのように人をとりこにする、そんな力を持つているように思う。ともかく、まずは機会を見つけて一度聴いてみて欲しいと思うのだ。

コドウシトス



材料 (4人分)

- ・トウモロコシのトルティーヤ 20枚
- ・トマト中 5個
- ・粉チーズ 40グラム
- ・サラダ油 150グラム
- ・バター お好みで
- ・タマネギ中 1/4
- ・塩

作り方

- 1) トマトを煮て皮をむく
- 2) タマネギをバラバラにしてゆでる
- 3) トマトとタマネギをミキサーにかけ、塩で味をととのえる。
- 4) できたソースにバターを加えてドロドロになるまでよく炒める。
- 5) トルティーヤを巻き (冷凍ものは事前に解凍して電子レンジで温めておく)、焦げないように気をつけて油で揚げる。
- 6) 油を切って、揚げたトルティーヤを大きめの平皿に並べる。その上にソースをたっぷりかけて、粉チーズをふる。

ミゲル・アクーニャ メキシコで中学・高校の英語教師をしたあと、1986年に来日。「FM COCOLO」でDJをつとめた。大阪・天満で「メリダスペイン語教室」(<http://www.merida-mex.com>) 主宰。メキシコ料理店を開くため、準備中。

今回は、ユカタン料理の「コドウシトス」を紹介したい。

料理の名は、マヤ語で「巻く」を意味する CODZ からとられている。語尾が「小さいもの」を意味する複数形「itos」になっているため、TAQUITOS ENROLLADOS (小さな巻きタコス) といった意味になる。

ユカタン周辺のキンタナロー州やカンペチエ州でもよく食べる。マヤ人ははるか昔、ユカタン半島が三州に分裂する前から、この料理を食べてきた。

メキシコの他の地域と異なり、ユカタにはスペイン語ではなくマヤ語の名をもつ料理が多い。今回の CODZITOS

(KODZITOS とつづることもある) のほか、DZOTOBICHAY' CHAYA CON HUEVO' TIKIN-XIK' MUKBILPOLLO などがある。MUKBILPOLLO は「PIB」と呼ばれること

もあり、とくに一月の「死者の日」に供される。地面に掘った穴をオープンがわりにして、バナナの葉を使って調理する。そのほか、POLLO PIBIL' COCHINTA PIBIL' HOROCH' POLKAN' SIKILPAK' PIBXKATIK' KABIK' PAPADZULES' POC-CHUC..... などマヤ語の名をもつ料理は数

え切れない。コドウシトスは、前菜として出されることが多い。子どもは小学校の休み時間によく買って食べていた。ユカタンの学

校では、清涼飲料水や飴、ケーキ、クッキー、パンなどを売っていて、休み時間に楽しんでた。中学生のころは、学校に食べ物の売店があり、学校の近所の公園にも売りに来ていた。公園で売っているコドウシトスはとてもおいしくて、友人とよく買いに出かけた。

家では来客があるときなどに母がつくってくれて、私たち兄弟は、喜んで料理を手伝っていた。

みなさんも、ご家族といっしょに、あるいはお客さんが来たときにつくってみたらいかがでしょう。とても簡単で、しかも上品な味わいです。ビールがすすみます。飲み過ぎにご注意を。

メキシコ —— ナルコ・ミリタル(麻薬マフィアの兵士)に対して重罰

メキシコ下院は今年の4月28日、犯罪組織や麻薬カルテルに入るために脱走した軍兵士に最高60年の刑を科するという法改正を可決した。麻薬カルテルとの闘いにおいて重要な任務を与えられている軍隊の汚職を食い止めるためである。最も凶暴な麻薬カルテルにエリート訓練を受けた兵士たちがいることはすでに知られている。シナロア・カルテルの中の殺し屋グループ、ロス・セタスは90年代終わりに軍隊の特殊部隊の兵士31人から67人が脱走してできたものだ。

ここ数年で10万人の兵士が脱走していることが防衛省のデータで明らかにされている。そのうちどれくらいのが麻薬カルテルに入っているかはわからないが、ロス・セタスは2009年に、米国国境に派遣されている軍兵士を高給でリクルートしていた。

法改正により、脱走を食い止め、軍への忠誠を強化することが目指すものあり、犯罪組織に加わった兵士は30年から60年の刑が適用され、軍から追放される。また、兵士が組織犯罪や麻薬密輸に加担した場合には15年から60年の刑が科せられる。

また、この法改正が可決された前日には改正が可決されたが、こちらは麻薬密輸撲滅戦争における軍の役割を制限するものだ。一般市民が多く殺害されていることと軍による人権侵害が告発されているからだ。カルデロン大統領が政権を取った2006年の12月以来麻薬密輸関連で殺された人びとは2万2千700人にのぼる。

(2010/04/28 BBC-Mundo より)

ラテンアメリカ —— 汚れた水は戦争以上に人を殺している

世界水の日である3月22日、国連は加速する都市化、工業化、不適切な衛生サービスが世界中の人が飲料水にアクセスすることを阻んでいると警告した。

国連環境計画(UNEP)の報告書「病気の水」によると、汚染された水による死者は戦争による死者を上回り、その数は毎年増加しているということだ。同報告書は毎日20億トンもの排水が世界中の水路に流れ込み、病気を引き起こしたり生態系に深刻な影響を与えているとしている。

ラテンアメリカは天然資源が豊富で、鉱山、石油や天然ガス、アグロビジネスが盛んだが、そのために多量の水を消費している他、有害な工業廃水を垂れ流しているケースも多い。農民、先住民族共同体は生活を維持するためのきれいな水を確保するために巨大な多国籍企業や自国の政府と闘わなければならない。UNEPは企業が廃水を利用可能なレベルにまで浄化するコストを担う企業責任があると指摘する。水をめぐる戦いは、アマゾンのエクアドルの油田開発や、ウルグアイの製紙工場、中米の大規模ダム開発などで頻発している。アンデス先住民族組織調整機関(CAOI)は、「水の商品化」は、国家が押し付けている資源を略奪する新自由主義政策の一環だと指摘し、大規模な工業開発は事前に先住民族と協議することを各国に要求している。

(2010/03/24 noticiasaliadas.org より)

ボリビア —— 奴隷状態に置かれているグアラニー先住民族

ボリビア南部の農業地域でグアラニー先住民の約600家族が強制労働や奴隷状態に置かれていることを米州人権裁判所(CIDH)が最新の報告書で明らかにした。ボリビア政府はこうした状況に対処し、グアラニー先住民族のテリトリー再建のために努力してはいるが、事態はいまだによくならない。共同体のメンバーが身に覚えのない「借金」のために労働をさせられるなど、その多くは賃金が支払われていない。

ボリビアには約8万人のグアラニー民族が住み、2001年のデータでは彼らが居住するチャコの南部地域の貧困率は75%以上で、貧富の差が極度に著しい。極貧状態におかれている先住民族は、「残忍な見せしめ」として農作物が焼かれたり、家畜が殺されたりしたために一層貧しくなったということだ。また国際法やボリビア憲法で全面的に禁止されている児童労働も行われているとCIDHは明らかにしている。チャコ地域には行政の存在がなく、警察も機能していないことが事態をさらに悪化させている、と報告書は指摘する。そしてボリビア国家がグアラニー民族の尊厳ある生活の権利を保障し、彼らの土地の集団的権利を守る対応策をとるように勧告している。

(2010/04/22 noticiasaliadas.org より)

**** Información ****

お知らせ

◆ブラジル・パラナ州写真展（兵庫県-パラナ州 友好提携 40 周年記念）◆

入場無料

日時：～7月19日 10:00～17:00

場所：海外移住と文化の交流センター（兵庫県神戸市中央区山本通 3-19-8）

問合せ：（財）日伯協会（TEL：078-230-2891）

◆写真展「マリオ・フェルナンデス・シルバが見たハイチ」◆

コスタリカ人写真家によるフォトエッセー。ハイチでの地震から約100日経った今、現地の人々の明るさと生命力を映し出す写真13点を紹介。

入場無料

日時：～7月3日 9:00～20:00

場所：セルバンテス文化センター東京（東京都千代田区 6-2-9 Tel: 03-5210-1800）

お知らせコーナーについてですが、そんりさは隔月発行となっており、切は奇数月の10日となっています。情報掲載ご希望の方はお早めをお願いします。リアルタイムでブログにて情報発信も行っていますので、こちらもご利用ください。

【ブログはレコムのHP <<http://www.jca.apc.org/recom/>> よりどうぞ】

レコム梅村図書館について

貸出を開始しております。寄贈等により、新刊も入ってきています。目録がお手元にならない方は事務局までお知らせください。ホームページにも目録を掲載しています。

会費について

会費期限は「そんりさ」をお届けする際の封筒宛名ラベルに印字しております。期限が来ましたら、事務局よりお知らせを同封しますので、お早めの更新をお願いいたします。

事務局短信

- ★そんりさの発送作業は主に京都にて。毎回、楽しい会になっています。終了後には一緒に食べたり、飲んだり。ぜひぜひお近くの方はお気軽にご参加ください！
- ★レコムではご自宅近くのイベントなどで民芸品を売ってくださる方を募集中！売上はグアテマラ基金に寄付されます。出店料・送料などの実費はレコムが負担します。
- ★電話は常時留守番電話となりました。伝言を残しておいて頂ければ、こちらより折り返しご連絡いたしますので、よろしくをお願いいたします。
- ★事務局長が大西裕子さんになります。斎藤忍さん、お疲れ様でした。連絡先等につきましては、京都のレコム図書館で変更ありません。

**** ** ** ** ****



今回の『そんりさ』発送作業は 8 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください。

大変な作業も、みんなでやれば楽しくあつという間です。

レコム・メーリングリストのご案内：会員・購読者は無料で参加できます。

登録したい方は E-mail : recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがどんどんリニューアル！

<http://www.jca.apc.org/recom/>

Vol.124 ハイチ大地震特集

Vol.120 コロンビア 慢性化した紛争

Vol.123 「やより賞」記念ツアー報告

Vol.119 ナルコメヒコ メキシコの麻薬

Vol.122 グアテマラ視察報告

Vol.118 エクアドル資源開発と先住民族

Vol.121 ペルー先住民族の動向

Vol.117 エクアドルの先住民族活動家

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。

入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。

レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円) …会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口) …資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004

京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556 (留守電)

お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは

は留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

76 万 2886 円

<グアテマラ基金>

25 万 6493 円

(2010 年 5 月 31 日現在)